

# 真劍摘まみ取り

— 漢文法の「補語」について (初稿) —

古田島洋介\*

うな語句が補語として扱われているかを見てみよう。紙幅を節約するため、一書だけを観察する。おそらく現行の漢文参考書のなかで最も豊富に訓読の知識を提供してくれる多久弘一・瀬戸口武夫『漢文解釈辞典』の文型解説を左に紹介してみよう。引用は「補語」の現れる文型だけに限る。まずは文型三Bだ。

三B (主語) + (述語) + 於 (補語)

1 忠言逆<sup>ハナラフ</sup>於<sup>ニ</sup>耳<sup>ニ</sup>。

2 彼婦<sup>ハ</sup>郷<sup>ニ</sup>。

3 水<sup>ハ</sup>為<sup>レ</sup>氷<sup>ト</sup>。

4 上杉<sup>ハ</sup>軍渡<sup>ニ</sup>。

犀川<sup>一</sup>。

## 一 問題の所在

一般に「補語」という文法用語を聞けば、英文法にいう「補語」、すなわち五文型のうち第II文型〈SVC〉および第V文型〈SVO C〉における〈C〉を思い起こすだろう。品詞としては、名詞相当語句(名詞・名詞句など)または形容詞相当語句(形容詞・形容詞句など)が補語〈C〉となる。今日の「民草悉皆英会話」の風潮のなか、英文法を嫌う向きも多いとはいえ、すでに補語〈C〉は日本国民の常識と称してよいだろう。

ところが、英文法とは異なり、ほとんど誰も見向きもしない漢文法では、補語〈C〉の性質が大きく変化する。いわば人目を忍んで姿形を変え、漢文法独特の装いを身にまとうのだ。論より証拠、漢文法でどのよ

ここにいう〔述語〕は、例文1〜4に関するかぎり、動詞を指していると考えてよい。端的に動詞と記さず、広く〔述語〕としたのは、たとえば「霜葉紅<sup>ハ</sup>於<sup>ニ</sup>二月花<sup>ニ</sup>」(霜葉は二月の花よりも紅なり)〔唐〕杜牧「山行」詩の「紅」のように、当該語位に形容詞が入る場合も考慮してのことなのだろう。それならば、なぜ形容詞を〔述語〕とする例文を一つも挙げないのか少し疑問にも思うが、今は問わないこととする。

肝腎なのは、前置詞「於」に下接する「補語」だ。「於〔補語〕」という書き方から見れば、前置詞「於」が従える名詞を「補語」と呼んでいように思える。けれども、例文1ならば名詞「耳」が「補語」に当たるとしても、例文2〜4には「於」が見えず、名詞「郷・氷・犀川」があるだけだ。ということは、「於〔補語〕」と記されてはいるものの、実際は「〔補語〕」(於+)名詞との意味合いなのだろう。つまり「補語」は名詞だが、場合によっては前置詞「於」を冠することもある」というわけである。何やら紛らわしい書き方だが、要するに、前置詞「於」の有無にかかわらず、自動詞「逆らふ・帰る・為る・渡る」など

に補充される成分を一括して「補語」と称しているようだ。

事実、この文型では、「述語」の動詞が自動詞である点に重きが置かれていられるらしく、著者自ら次のように「説明」を記している。

補語は述語（自動詞）の意味を補う語でニ・ト・ヨリと送り仮名することが多い。ただし述語が行クの類「涉・渡・登・越・飛・攀・泳」などの場合はヲと送り仮名することが多い。

明らかに、訓読に用いる日本語を念頭に置いての説明だ。たしかに、四つの例文に見える述語「逆らふ・帰る・為る・渡る」は、すべて日本語として自動詞である。しかし、たとえば例文4「上杉軍渡<sub>ル</sub>犀川<sub>ヲ</sub>」の「渡」が漢文すなわち古典中国語として自動詞と言えるのかについては、かなり疑問の余地があるに違いない。それは、この一文を「The soldiers of Uesugi crossed the River Sai」とでも英訳してみれば、ただちにわかる。「cross」が他動詞であることは自明だろう。実際、著者自身も自動詞と他動詞の区別が曖昧であることは意識しており、左のように補足している。

なお英語などのように目的語と補語の区別はうるさくいうことはあまりないし、漢文では決定しにくい場合もある。ただしこの本では一応区別することにする。

そもそも古典中国語において自動詞と他動詞の区別が明確でない以上、敢えて区別するとなれば、訓読するさいの扱い、つまり日本語として自動詞なのか他動詞なのかを基準にするしかなかったのだろう。これはこ

れで一つの方針である。

けれども、結果として、それが教授法として最善かどうかは、また異なる性質の話だ。著者の言い分をすべて認めるとしても、文型三Bに示された「補語」が英語の「補語」と大いに異なる点は否めまい。右の文型三Bは英語の第II文型〈SVC〉に相当するはずだが、英語の「補語」感覚ですんなり納得できるのは、せいぜい例文3「水<sub>ヲ</sub>為<sub>ル</sub>氷<sub>ト</sub>」くらいのはずだ。右に言及したとおり、例文4「上杉軍渡<sub>ル</sub>犀川<sub>ヲ</sub>」は、他動詞「渡」を用いた第III文型〈SVO〉にししか見えないだろう。例文2「彼<sub>ノ</sub>郷<sub>ニ</sub>」も、「帰」を他動詞と捉え、第III文型〈SVO〉と答える向きが大半を占めるのではないか。「帰郷」から英語〈return home〉を連想すれば、副詞〈home〉に当たる「郷」を文型の成分から外して、第I文型〈SV〉と考えるかもしれない。例文1「忠言<sub>ヲ</sub>逆<sub>ル</sub>於<sub>ニ</sub>耳<sub>ニ</sub>」に至っては、〈前置詞「於」+名詞「耳」〉が副詞句としか思えないため、第II文型〈SVC〉と考える向きは皆無、まず全員が第I文型〈SV〉と答えるだろう。ここまで英語の「補語」とは食い違ってしまうのである。もう一つ、「補語」の現れる文型四A〜Cを見てみよう。

四A〔主語〕+〔述語〕+〔目的語〕+於〔補語〕

1 孔子<sub>ト</sub>問<sub>フ</sub>於<sub>ニ</sub>礼<sub>ニ</sub>於<sub>ニ</sub>老子<sub>ト</sub>。 2 余<sub>ハ</sub>觀<sub>ル</sub>花<sub>ヲ</sub>嵐<sub>ヲ</sub>山<sub>ニ</sub>。 3 人<sub>ハ</sub>謂<sub>フ</sub>彼<sub>ノ</sub>大丈夫<sub>ト</sub>。

4 父<sub>ハ</sub>救<sub>フ</sub>子<sub>ヲ</sub>於<sub>ニ</sub>火<sub>中</sub>。

四B〔主語〕+〔述語〕+〔補語〕+〔目的語〕

1 彼<sub>ハ</sub>与<sub>テ</sub>我<sub>ト</sub>書<sub>ス</sub>。 2 奈何<sub>ハ</sub>責<sub>ム</sub>人<sub>ヲ</sub>於<sub>ニ</sub>全<sub>ト</sub>。

四C〔主語〕+〔述語〕+〔補語〕+於〔補語〕

1 管仲<sub>ハ</sub>仕<sub>ル</sub>桓公<sub>ヲ</sub>於<sub>ニ</sub>齊<sub>ニ</sub>。 2 乘<sub>ル</sub>舟<sub>ヲ</sub>江<sub>ヲ</sub>湖<sub>ニ</sub>。

四Aにいう「於〔補語〕」も、四つの例文から推して、一応は右の文型三Bに見えた「於〔補語〕」と同じ意味合いに受け取ってよからう。つまり、実際は「〔補語〕＝(於＋)名詞」と解すべきところだ。ただし、直前に「目的語」が位置しており、「述語」が他動詞であることは明らかのため、この「於〔補語〕」は、自動詞の補充成分ではない。英語の第Ⅲ文型〈SVO〉に後置された要素を、すべて一括して「補語」と呼んでいると考えてよいだろう。前置詞「於」の有無について、著者は「説明」に「目的語と補語との間が明瞭である場合などは略することがある」と記すが、これは例文2「余觀<sup>ル</sup>花嵐山<sup>ニ</sup>」に関する解説に違いない。また、例文3のような「<sup>ハス</sup>…<sup>ヲ</sup>…」の形式については、「多くは前置詞を用いない」とも記している。同一の文型四Aとしてまとめられているには、前置詞「於」の有無についての説明が何やら一貫しない印象だ。

しかし、著者の説明をそのまま受け容れるにしても、英語の文型と引き比べると、多大な違和感を禁じ得ないだろう。四Aとして示された「〔主語〕＋〔述語〕＋〔目的語〕＋於〔補語〕」を見れば、目障りな前置詞「於」に暫くは目をつむり、誰もが英語の第Ⅴ文型〈SVO C〉を想起するはずだ。けれども、第Ⅴ文型に当てはまるのは、「彼<sup>ニ</sup>大丈夫」という関係が成り立つ例文3のみ。他の例文1・2・4に「補語」として記されている「於老子」「嵐山」「於火中」は、前置詞「於」の有無はともかく、いずれも第Ⅲ文型〈SVO〉に後置された副詞句としか言えないようがあるまい。なぜ例文3と例文1・2・4とが一つの文型にまとめられているのか、さっぱり理解できないだろう。

四Bとして挙げられた「〔主語〕＋〔述語〕＋〔補語〕＋〔目的語〕」は、英語の文型感覚では把握できない構文だ。だが、すわ漢文独自の構

文かと思いきや、例文1「彼<sup>ヲ</sup>我書<sup>ニ</sup>」を見て、不思議な思いに囚われるのではないか。誰の目にも、この例文1は、「我」を間接目的語(O)、<sup>書</sup>を直接目的語(DO)とする英語の第Ⅳ文型〈SVOO〉に映るからである。なぜ間接目的語(O)の「我」を「補語」と呼ぶのか。そして、その当惑は、例文2によって、いっそう増幅されるに違いない。文型には「〔補語〕＋〔目的語〕」とだけ記されているのに、例文2では、「於全」のごとく、目的語「全」に前置詞「於」が冠せられているからである。著者は、この四Bに関する「説明」に「これは補語が目的語の前にある場合で、前置詞を用いることはほとんどない」と記しているのだが、それならば、なぜ文型に「於〔目的語〕」のごとく前置詞「於」を示しておかないのだろうか。前置詞「於」を使うのがよほどの例外ならば、どうして二つしか挙げていない例文の一つにそれほど例外を組み入れたのか。今一つすっきりしない印象である。おそらく例文2は、たとえば「躬自厚<sup>ク</sup>而薄責<sup>ニ</sup>於人<sup>ヲ</sup>、則遠<sup>ク</sup>怨<sup>ム</sup>矣<sup>ニ</sup>」(躬自<sup>ニ</sup>厚くして薄く人を責むれば、則ち怨みに遠ざかる／『論語』衛霊公)に見える表現「責於N」のNに「全」を入れ、さらに「責」の対象たる「人」を加えて、「責人於全」としたものののだろうか。「責」は「求める」意であるから、英語で言えば「I asked him for money」と同じ構文だ。そうだとすれば、誰が見ても第Ⅲ文型〈SVO〉そのものであり、「for money」に相当する「於全」は副詞句と考えるのが通常の文法感覚ではなかろうか。

四Cも、何やら腑に落ちない思いをするだろう。「〔主語〕＋〔述語〕＋〔補語〕」は、誰が見ても英語の第Ⅱ文型〈SVC〉だ。けれども、例文1「管仲仕桓公」も例文2「乗舟」も、一見〈SVO〉としか思えない構文である。前掲の三Bにおける自動詞云々を思い出し、自動

詞「仕ふ」「乗る」に下接しているのだから「桓公」も「舟」も「補語」として扱われているのだろうと一応は納得したとしても、さらに下文の「於斉」「江湖」までもが「補語」となれば、どうにも頭のなかが混乱するのではなからうか。英語の感覚で言えば、「於斉」も「江湖」も歴とした副詞句だからである。前置詞「於」を冠した「於斉」が副詞句であるのももちろんのこと、「江湖」も名詞がそのまま副詞に転用された語句と考えれば、英語の構文感覚によるかぎり、とても「補語」とは思えないだろう。

以上から理解できるとおり、漢文法に用いられる「補語」は、英文法にいう「補語」とは別物なのだ。正確には、〈漢文法の「補語」は、英文法の「補語」を含みつつも、さらに広い概念で使われている〉と断言してよいだろう。

英語の「補語」感覚で素直に受け取れるのは、合計十二例のうち、次の二例だけである。

- 三B3 水為<sub>レ</sub>氷。 第II文型〈SVC〉 \*補語C || 氷
- 四A3 人謂<sub>二</sub>彼大丈夫。 第V文型〈SVO〉 \*補語C || 大丈夫

右以外の十例に見える「補語」は、すべて英語の「補語」概念と相違する。「補語」と説明されている語句を英語の構文感覚で捉え直せば、次のようになるはずだ。

- 三B1 忠言逆<sub>二</sub>於<sub>レ</sub>耳。 \*「於耳」 || 副詞句
- 2 彼帰<sub>レ</sub>郷。 \*「郷」 || 目的語
- 4 上杉軍渡<sub>二</sub>犀川。 \*「犀川」 || 目的語

- 四A1 孔子問<sub>二</sub>礼<sub>二</sub>於<sub>レ</sub>老子。 \*「於老子」 || 副詞句
- 2 余觀<sub>二</sub>花<sub>二</sub>嵐山。 \*「嵐山」 || 副詞(名詞の転用)
- 4 父救<sub>二</sub>子<sub>二</sub>於<sub>レ</sub>火中。 \*「於火中」 || 副詞句
- 四B1 彼与<sub>二</sub>我<sub>レ</sub>書。 \*「我」 || 間接目的語
- 2 奈何責<sub>二</sub>人<sub>二</sub>於<sub>レ</sub>全。 \*「人」 || 目的語
- 四C1 管仲仕<sub>二</sub>桓公<sub>二</sub>於<sub>レ</sub>斉。 \*「桓公」 || 目的語 「於斉」 || 副詞句
- 2 乘<sub>二</sub>舟<sub>二</sub>江湖。 \*「舟」 || 目的語 「江湖」 || 副詞(名詞の転用)

英語にいう「補語」はもちろんのこと、「(間接)目的語」や「副詞(句)」をもすべて「補語」と称しているわけである。

一見してわかるように、「補語」と呼んでいる語句のほとんどすべてが助詞「に」を送ってある語だ。唯一、助詞「を」が送られている三B4「犀川」については、動詞「渡」が日本語の自動詞「わたる」であることを根拠に補語として扱っているのだろう。前に引いた著者自身の「説明」に見えるとおり、「補語は述語(自動詞)の意味を補う語であり、「述語が行クの種類〈渉・渡・登・越・飛・攀・泳〉などの場合はヲと送り仮名することが多い」からである。むしろ、動詞が「登」でも、「登山」のような語ならば「登山」を、すなわち助詞「に」を送るようになるのだが。

我々が一般に「補語」として心得ている英語の「補語」から見れば、漢文の「補語」ははるかに広い意味で用いられており、どうやらそこには日本語の自動詞か他動詞かに基づく判断も混入しているらしいということになる。英語の「補語」は英語の「補語」、漢文の「補語」は漢文の「補語」、両者は別立ての話と割り切ってしまうれば、それまでだ。し

かし、複数の外国語を学習した経験のある専門家であればいざ知らず、「補語」と言えば英語の「補語」しか知らない中学生や高校生に対して、いきなり漢文の「補語」を呈示する意味がどこにあるのだろうか。しかも、現在の細々とした漢文教育、いや惨状と称すべき漢文教育のきわめて限られた時間のなかで、果たして漢文の「補語」が英語の「補語」と異なることを丁寧に説明する余裕があるだろうか。ここまで引用してきた多久弘一・瀬戸口武夫『漢文解釈辞典』は、現行の漢文参考書のなかでは、かなり懇切丁寧な説明が加えられている一書だ。けれども、漢文の「補語」と英語の「補語」との相違には何も言及していない。これでは、いきなり文型を示されても、習い覚えた英語の「補語」との違いに戸惑うばかり、わかったようなわからぬような気分のまま、結局は学習意欲を失ってしまうのではなからうか。

## 二 漢文「補語」の由来——フランス語文法の導入

では、漢文の「補語」は、なぜ英語の「補語」と大きくずれているのか。そもそも漢文の「補語」は、何に由来する文法概念なのだろうか。

実のところ、これについては、すでに種明かしの字句がある。小川環樹・西田太一郎『漢文入門』に次のような記述が見えるのだ。

この書物では、述語の後に在ってその述語の内容を補足する語を補語と仮りに名づける。これはフランス文法の用語を借りたもので、補語のうちに目的語も含まれるものとする。もし補語のうちから目的語だけを弁別しようと思えば、前の語が他動詞であるかどうかで区別すればよいが、漢文では決定し難い場合もある。

この説明で、漢文の「補語」の出自は明らかであろう。英語の「補語」と異なるのも宜なるかなだ。漢文の「補語」とは仮の姿、もとを質せばフランス語の「補語」だったのである。何しろ、右の字句は、漢文の語句「読書」について、「動詞が前にあり名詞が後にあり、へ書を読む」を意味し、後の名詞は前の動詞の補語である」と述べた直後に見える補足説明なのだ。英文法の感覚で受け取れば、誰が見ても「読書」は〈動詞+目的語〉であろう。それを〈動詞+補語〉と解説している以上、端から英語の「補語」は放棄されているわけだ。前節で取り上げた多久弘一・瀬戸口武夫『漢文解釈辞典』の文型表示の裏には、このような事情があるらしい。

むろん、『漢文解釈辞典』は、『漢文入門』をそのまま踏襲しているわけではない。右の説明の後半に見える「もし補語のうちから目的語だけを弁別しようと思えば」を実践し、「補語」と「目的語」を区別している。その点で、竿頭に一歩を進めんとした跡がうかがえることは間違いない。もっとも、前節で観察したとおり、『漢文解釈辞典』は、訓読したさいに日本語として、自動詞なのか他動詞なのかを基準として、「補語」と「目的語」とを区分けしているようだが。

未だ調査が行き届いていないため、小川環樹・西田太一郎『漢文入門』こそが、漢文の「補語」が実はフランス語の「補語」であることを明確に述べた初めての書物であるのかどうか、そこまではわからない。しかし、このフランス語の「補語」路線を引き継いでいるのは、決して多久弘一・瀬戸口武夫『漢文解釈辞典』に限らないようだ。天野成之『漢文基本語辞典』も、漢文の「補語」の一部にフランス語の「補語」概念の一種、すなわち「状況補語」を導入していることを明らかにして



いる。

天野成之『漢文基本語辞典』の巻頭「本辞典の構成」に見える項目中、「4 文型」に記された字句<sup>3)</sup>は、おそらく類書のなかで最も詳細かつ丁寧な文法概念の説明であろう。「④体言」「⑤用言」「⑥主語」について、それぞれ「古典文法の概念」つまり日本語の文語文法という用語であることを記し、さらに「⑦目的語」のみならず「⑩句」「⑪節」に関しては「英文法」の概念であると述べる。ここまで厳密な記述は、他書で見た記憶がない。そして、肝腎の「補語」については、周到にも「⑧補語」と「⑨状況補語」の二種を用意している。まずは「⑧補語」の説明を見てみよう。

⑧補語は英文法概念で、「主語または目的語に関する叙述を補い、述部を完成させる語」を意味し、主語と補語の関係が成り立つ主格補語と目的語と補語の関係が成り立つ目的格補語とがある。本辞典では主格補語の場合に限って、補語という用語を使用した。

なぜ「主格補語の場合に限って、補語という用語を使用した」のか、逆に言えば、どうして目的格補語を放棄したのが気になるところだが、この『漢文基本語辞典』は文字どおり漢文の基本語の用法だけに限って懇切な解説をほどこした一書で、そのなかに「謂」は含まれない。もし「謂」の用法にも説明を加えるとなれば、たとえば「不<sup>レ</sup>教<sup>ニ</sup>而<sup>レ</sup>殺<sup>ス</sup>、謂<sup>フ</sup>之<sup>ヲ</sup>虐<sup>ト</sup>」(教<sup>ヘ</sup>ずして殺<sup>ス</sup>、之<sup>ヲ</sup>を虐<sup>ト</sup>と謂<sup>フ</sup>／『論語』堯曰)のような一文について、「虐」を「之」の目的格補語と説明する場面が生じたはずである。要するに、取り立てて目的格補語と呼ぶべき語が書中に現れないため、主格補語を単に補語と称しても差し支えないわけだ。これはこれで

一つの措置である。

次は「⑨状況補語」の解説だ。これは注目すべき字句である。

⑨状況補語はフランス語文法概念で、「動詞の表す状態及び動作に伴う状況を示す文の副詞的要素」を意味し、英語では副詞・副詞句に相当する。漢文の「有」「無」の文型では、漢語の主語は訓読すると、「状況を示す文の副詞的要素」と理解することも可能であり、英語の副詞・副詞句の用語を使いにくい。そのため、フランス語文法の状況補語という用語を採用した。

いささか耳慣れない「状況補語」とは何かと思いきや、やはりフランス語文法の導入だ。しかも、それを「有」「無」などを使った存在構文に限って用いると宣言しているわけである。実際、書中において「状況補語」を用いた説明が見られるのは、「有」「無」そして「莫」に関する存在構文の解説のなかだけだ。いわば存在構文専用の文法概念として、フランス語文法から「状況補語」を借用したのである。

もう一つ、「⑩句」も見ておこう。右に引いた「状況補語」が副詞句と区別されていることを確認するためである。

⑩句は英文法概念で、「主語・動詞を含まない二つ以上の語が集まって、一つの品詞と同等の働きをするもの」を意味する。名詞句と副詞句の二つを借用する。

この説明を見れば、右の「状況補語」が副詞句とは異なる概念だとわかるだろう。「状況補語」と聞くと、一瞬、副詞句の別称のように響く

かもしれないが、実は然<sup>さ</sup>に非ず、両者は別物なのである。

ここまで、多久弘一・瀬戸口武夫『漢文解釈辞典』、小川環樹・西田太一郎『漢文入門』、天野成之『漢文基本語辞典』の三書について、どのように漢文の「補語」が用いられているのかを観察してきた。刊行年の最も早い『漢文入門』（昭和三十二年）は、「目的語」を使わず、すべて「補語」に含めている。次に古い『漢文解釈辞典』（昭和五十四年）は、フランス語文法には、まったく触れていないものの、やはりフランス語の「補語」の影響を受けているのだろう。「目的語」を設けつつも、「補語」を広い意味に用いている。最も新しい『漢文基本語辞典』（平成十一年）は、英語の「目的語」はもちろん、英語の「補語」をも使いながら、「状況補語」についてだけは、フランス語の「補語」概念を借用したものと明記している。

全体として、フランス語の「補語」概念が占める領域は、次第に狭くなってきていると考えてよい。しかし、今なお漢文法の「補語」概念にフランス語の「補語」が紛れ込んでいることは事実だ。生徒・学生たちが少し漢文を勉強しようと思えば、市販の参考書を買えば求めれば、フランス語をかじったことすらないにもかかわらず、その漢文法の「補語」は、英語の「補語」そのものではなく、フランス語の「補語」を斟酌した概念だと言われるわけである。果たして、これが学習参考書にふさわしい説明と呼べるだろうか。どのような語句を「補語」と称しているのか、用例を点検する気さえ起こらず、見当すらつかない「フランス語」云々に嫌気が差し、のっけから学習意欲を削<sup>そ</sup>がれてしまうのではないか。

### 三 フランス語文法の「補語」とは何か

では、そもそも漢文法が借用したフランス語の「補語」とは、どのような構文要素を指すのか。なぜ、フランス語の「補語」を漢文法に持ち込む必要があったのだろうか。

一般に、フランス語文法は、文型に対して冷淡なようだ。本場フランスの語学学校でフランス語を習い、十数年間フランスに滞在した経験のある方にうかがってみても、特に文型について教わった記憶はないという。手もとにあるフランス語文法の諸書を検しても、取り立てて「文型」の項目を設け、英語の五文型に相当するような記述を加えた書籍は容易には見当たらない。おそらくは私の不勉強と怠慢が最大の原因と思うが、ほぼ唯一、明確にフランス語の文型を示しているのは、『プチ・ロワイヤル仏和辞典』付録「文法解説」に見える「X構文」の冒頭に記された「基本文型」である<sup>4</sup>。

当該項目の説明によれば、フランス語では一般に基本文型として六文型を立てるといふ。今、その説明に従って、わかりやすさを重んずべく、子ども向けの読み物 *Christine Ferreira, Jeanne d'Arc hier et aujourd'hui, Librairie Hachette, 1971, Paris* から一つずつ例文を拾えば、次のようになる。それぞれに拙訳を添え、英語の五文型との対比も示しておこう。ただし、『プチ・ロワイヤル仏和辞典』は第V文型について「主語＋動詞＋直接目的語＋間接目的語」の例文のみを挙げるが、ここでは、英語との対比の便宜上、二種の目的語の順序を入れ換えた「主語＋動詞＋間接目的語＋直接目的語」の例文をも加えておく。つまらぬ蛇足かもしれないが。

I La guerre de Cents Ans commence. (百年戦争が始まった / p. 9)

▷主語+動詞 = [英] 第I文型〈SV〉

II Le ciel est bleu. (空は青かった / p. 20)

▷主語+動詞+属詞 = [英] 第II文型〈SVC〉

III Jeanne regarde la belle campagne. (ジャンヌは美しい農村をながめていた / p. 20)

▷主語+動詞+直接目的語 = [英] 第III文型〈SVO〉

IV Un nouveau roi de France ... réussit à battre plusieurs fois les Anglais. (新たに即位したフランスの王は、数度にわたって首尾よくイギリス軍を撃破した / p. 11)

▷主語+動詞+間接目的語 → [英] 該当文型ナシ

V Aussi bien que la campagne, la ville donne une grande place à la religion. (農村と同じく、都会でも宗教が生活のなかで大きな比率を占めていた / p. 16)

▷主語+動詞+直接目的語+間接目的語 → [英] 第III文型〈SVO〉

Le lendemain, elle demande une fois de plus aux Anglais d'arrêter la guerre; ... (翌日、ジャンヌはもう一度イギリス人たちに戦争をやめるように求めた / p. 42)

▷主語+動詞+間接目的語+直接目的語 = [英] 第IV文型〈SVOO〉

VI Jeanne trouve le temps long. (ジャンヌはその時間を長いと思っ / p. 34)

▷主語+動詞+直接目的語+属詞 = [英] 第V文型〈SVO C〉

一瞥したとたん、フランス語は英語と文法用語が異なっていることに気づくだろう。第II文型・第VI文型に見える「属詞」attribut すなわち〈bleu〉〈long〉は、英語の「補語」に相当する。また、英語ならば〈前置詞+名詞〉はほぼ一律に「副詞句」としてしまおうところだが、第IV文型・第V文型が掲げる「間接目的語」すなわち〈à battre...〉および〈à la religion〉〈aux Anglais〉はいずれも前置詞〈à〉を冠した語句である。

顧みれば、多久弘一・瀬戸口武夫『漢文解釈辞典』は、三B〔主語〕+〔述語〕+於〔補語〕の例文3「水為氷」の「水」、および四A〔主語〕+〔述語〕+〔目的語〕+於〔補語〕の例文3「人謂彼大丈夫」の「大丈夫」を、いずれも「補語」と呼んでいた。「属詞」という用語は使っていない。そのかぎりでは、フランス語文法ではなく、英文法と違ってよいわけだ。小川環樹・西田太一郎『漢文入門』も天野成之『漢文基本語辞典』も、「属詞」を採用していない点では同様である。

もっとも、右の六文型を見るだけでは、なぜ小川環樹・西田太一郎『漢文入門』がわざわざ「補語」について説明を加え、「フランス文法の用語を借りたもので、補語のうちに目的語も含まれるものとする。もし補語のうちから目的語だけを弁別しようと思わなければ」云々と述べていたのか、まったく見当すらつかないだろう。右の六文型には、どこにも「補語」という用語が見えないからである。

ここで、改めてフランス語文法の「補語」について調べてみれば、右の六文型に示されている用語が実は英文法との妥協の産物ではないかと



推察できる。当該六文型を掲げる『プチ・ロワイヤル仏和辞典』自身の「補語」に関する説明は左のとおり。

フランス語文法で補語と呼ぶのは、付加形容詞と同格語以外のすべての副次的要素であり、〈前置詞＋名詞〉の形で名詞・形容詞・副詞を修飾する（限定）補語、動詞を修飾する副詞句（相当語句）である状況補語、*par* や *de* で導入される動作主補語などがある。

右の「付加形容詞と同格語以外のすべての副次的要素」という「補語」の規定を見れば、実のところ、六文型に記されている「直接目的語」「間接目的語」は、本来「直接目的補語」「間接目的補語」と称すべきものだとわかるだろう。直接にせよ間接にせよ、目的語は「付加形容詞」でも「同格語」でもないからだ。実際、フランス語の「補語」には少なくとも次のような六種類を数えることができる。大ざっぱに言えば、フランス語文法では、「他の語に付加し、その意味を完成させる語句」を一括して「補語」と呼ぶのだ。

①直接目的補語 *complément d'objet directe*

Il a une voiture. (彼は車を持っている)

②間接目的補語 *complément d'objet indirecte*

Il a réussi à son examen. (彼は試験に合格した)

③状況補語 *complément circonstanciel*

Nous dînons à huit heures. (私たちは八時に夕食を取る)

④付与「帰属」補語 *complément d'attribution*

Je donne cette fleur à Marie. (私はこの花をマリーにあげる)

⑤動作主補語 *complément d'agent*

Le voleur a été arrêté par la police. (泥棒は警察に逮捕された)

⑥限定補語 *complément déterminatif*

Elle a nettoyé la salle de bains. (彼女は風呂場を掃除した)

英文法であれば、①は「直接目的語」、②は「間接目的語」、③④⑤は「副詞句」、⑥は「形容詞句」と称するところだろう。すなわち、『プチ・ロワイヤル仏和辞典』の六文型に見えた「直接目的語」「間接目的語」は、英文法に寄り添った呼称にすぎず、もともとフランス語文法では「直接目的補語」「間接目的補語」と呼ぶべき性質の語なのである。

小川環樹・西田太一郎『漢文入門』がこのような広義の「補語」を念頭に置いていたことは確かだろう。また、多久弘一・瀬戸口武夫『漢文解釈辞典』は、右のうち主として助詞「を」を付けて訓読する①「直接目的補語」だけを「目的語」として抽出したようだ。さらに、天野成之『漢文基本語辞典』は、その定義から明らかなく、右の③「状況補語」のみを「有」「無」などを用いる存在構文用の説明に残している。前に記したように、三書とも「属詞」は借用せず、「補語」だけを導出したのであるから、導入の仕方こそ三者三様とはいえ、フランス語文法の摘まみ取りであることは明らかだろう。

#### 四 フランス語文法の「補語」を導入した理由

ただし、摘まみ取りと呼ぶのは、決してフランス語文法の借用を貶さんとする意図からではない。肝腎なのは、なぜフランス語文法の「補

語」概念を導入する必要があったのか、その理由である。小川環樹・西田太一郎『漢文入門』も多久弘一・瀬戸口武夫『漢文解釈辞典』もフランス語文法の「補語」概念を導入していることは事実だろうが、その導入の理由については明確な記述がない。手がかりとなるのは、すでに引用した両書の字句のうち、前者の「もし補語のうちから目的語だけを弁別しようと思うならば、前の語が他動詞であるかどうかで区別すればよいが、漢文では決定し難い場合もある」および後者の「英語などのように目的語と補語の区別はうるさくいうことはあまりないし、漢文では決定しにくい場合もある」であろう。要するに、漢文では動詞が自動詞なのか他動詞なのか判別しづらいため、動詞に下接する名詞を目的語と呼べるのか否か、疑問の余地が残るといふことである。おそらく、この事情を暗に物語るのが、前掲のフランス語の六文型のうち、英語に該当文型が存在しない第IV文型に違いない。左に簡潔を期して再掲してみれば

IV Un nouveau roi de France ... réussit à battre plusieurs fois les Anglais. (新たに即位したフランスの王は、数度にわたって首尾よくイギリス軍を撃破した)  
 ▼主語+動詞+間接目的補語

右に見える〈réussir〉のよう(前置詞)ここでは〈à〉を介して下文に続いてゆく動詞、つまり間接他動詞とも称すべき語の現れる文を文型のうえでどう考えるかが漢文でも問題となるわけだ。端的な例を挙げれば、動詞「学」を用いた次のような二つの文の文型上の扱いである。

(ア) 行有<sup>ヒテラバ</sup>餘力、則以<sup>チテベ</sup>学<sup>レ</sup>文<sup>ヲ</sup>(『論語』学而)  
 (イ) 君子博<sup>ク</sup>学<sup>ニ</sup>於<sup>テ</sup>文<sup>ヲ</sup>、約<sup>ク</sup>之<sup>ヲ</sup>以<sup>テ</sup>礼<sup>ヲ</sup>……(『論語』雍也・顔淵)

要は(ア)「学<sup>レ</sup>文<sup>ヲ</sup>」と(イ)「学<sup>ニ</sup>於<sup>テ</sup>文<sup>ヲ</sup>」との相違である。意味のうえで、両者に差はない。動詞「学」は、いわば直接他動詞として、直接に名詞「文」を従えることもあれば、いわば間接他動詞として、動作の対象を表す前置詞「於」を介し、間接に名詞「文」と結合することもあ  
 るわけだ。

英語ならば、捌き方は容易である。問答無用で、(ア)の「学」は他動詞、名詞「文」は目的語、(イ)の「学」は自動詞、前置詞「於」+名詞「文」は副詞句としてしまえばよい。あくまで前置詞「於」の有無を基準とし、形式的に(ア)は第Ⅲ文型、(イ)は第Ⅰ文型と仕分けできる。

けれども、漢文としては、(ア)と(イ)の文型が異なると言われても違和感を否めないだろう。どちらにせよ同義である以上、たまたま前置詞「於」の有無が生じているだけと捉えたいのが実感である。そして、ここでフランス語文法が役立つわけだ。フランス語文法であれば、(ア)は〈直接他動詞「学」+直接目的補語「文」〉、(イ)は「間接他動詞「学」+間接目的補語「於文」」となり、いずれも大づかみに〈動詞+補語〉と把握できるからである。フランス語文法を援用すると、なかなかうまく捌けるわけだ。むしろ、〈前置詞「於」+名詞「文」〉を「補語」と称するのであれば、他の〈前置詞+名詞〉つまり英文法にいう副詞句も、軒並み「補語」と呼ぶしかない。こうして、漢文法の「補語」が、フランス語文法の「補語」と同じく、その適用範囲を広げてゆくことになる。

このフランス式「補語」の導入がもたらす利便は、同じく『漢文解釈辞典』の例文中、四Aの第2例、四Bの第2例でも遺憾なく發揮される。再掲してみれば――

四A 2 余觀<sup>ル</sup>花<sup>ヲ</sup>嵐<sup>ニ</sup>山<sup>ニ</sup>。

四B 2 奈何<sup>ソノ</sup>責<sup>メ</sup>人<sup>ヲ</sup>於<sup>テ</sup>全<sup>ク</sup>。

前者は、場所を表す名詞「嵐山」が剥き出しで、本来ならば前置詞「於」を冠して「於嵐山」と記してほしいところ。後者は、直接目的語であってほしい「全」に前置詞「於」が付いているため、いささか扱いに苦しむところだ。しかし、着脱自在の前置詞「於」には拘らず、一括して「補語」として扱えば、それで事は済んでしまうのである。

小川環樹・西田太郎『漢文入門』も多久弘一・瀬戸口武夫『漢文解釈辞典』もフランス語文法の「補語」概念を導入した理由を明確に記述していない以上、果たして右の推察が正しいのかどうか、保証のかぎりではない。たぶん、中たらずと雖も遠からずだろうとは思うが。

一方、天野成之『漢文基本語辞典』は、前に見たとおり、フランス語文法から「状況補語」の概念だけを借用した理由をはっきり述べている。「有」や「無」を用いた存在構文についてだけは、主語を「状況補語」と呼ぶこともあるというわけだ。実際、『漢文基本語辞典』の「有」に関する記述を見ると、「有」の直前に位置する語について、おおむね「有」が存在を表す場合は「状況補語」、「有」が所有を表す場合は「主語」と説明している。同書の構文分析を添えて示せば、次のような具合だ。<sup>(6)</sup>

・宅<sup>ニ</sup>有<sup>リ</sup>五<sup>ツ</sup>柳<sup>ノ</sup>樹<sup>。</sup>（『東晋 陶淵明「五柳先生伝」』）

・状況補語「宅<sup>ニ</sup>」＋動詞「有<sup>リ</sup>」＋主語「五<sup>ツ</sup>柳<sup>ノ</sup>樹<sup>。</sup>」

・今<sup>ニ</sup>独<sup>リ</sup>臣<sup>ト</sup>有<sup>リ</sup>船<sup>。</sup>（『史記』項羽本紀）

・主語「臣<sup>ト</sup>」＋動詞「有<sup>リ</sup>」＋目的語「船<sup>。</sup>」

「無」についても、同様の説明が加えられている。やはり同書の構文分析を添え、要所のみを示せば――

・寡<sup>シ</sup>人<sup>無<sup>シ</sup>疾<sup>。</sup></sup>

・主語「寡<sup>シ</sup>人<sup>無<sup>シ</sup>疾<sup>。</sup>」＋動詞「無<sup>シ</sup>」＋目的語「疾<sup>。</sup>」</sup>

・梁<sup>ニ</sup>無<sup>シ</sup>相<sup>。</sup>（『說苑』雜言）

・状況補語「梁<sup>ニ</sup>」＋動詞「無<sup>シ</sup>」＋主語「相<sup>。</sup>」

たしかに、助詞「に」を添えた「宅<sup>ニ</sup>」や「梁<sup>ニ</sup>」は、「主語」と呼ぶよりも、フランス語文法にいう「状況補語」を用いるほうが受け取りやすいだろう。「宅<sup>ニ</sup>」も「梁<sup>ニ</sup>」も名詞である以上、同書の「状況補語」に関する説明にあったとおり、「英語の副詞・副詞句の用語を使いにくい」のも事実である。こうした点で、やはりフランス語文法から「状況補語」を借用したことにも、それなりの理由があることはたしかだ。

## 五 フランス語文法「補語」概念の消去

しかし、である。フランス語文法の「補語」がどれほど漢文法に都合な概念であったとしても、結果として初学者たる生徒・学生たちに漢文の文型を示すさいに混乱を招く事態は避けられまい。英文法の「補

語」さえ覚束ない可能性のある中高生たちに、いきなりフランス語文法の「補語」を持ち出して、すんなり理解できるはずはなからう。大学生ならば何とかなると思うのも楽観的に過ぎる。周知のように、現在、大学で第二外国語としてフランス語を学ぶ学生の比率はきわめて低く、しかも大半がとうていフランス語に習熟したとは言えない程度の実力だ。いや、そもそもフランス語文法の「補語」概念を明確に説明しつつ漢文法を教えられる教員がどれほどいるだろうか。それも、フランス語を使わずに、という厳しい条件付きとなれば、ほぼ絶望に近いのではないかとさえ説明しても、たいていは生煮えの解説に終わる可能性が高いだろう。また、何も説明せぬまま、漢文法にフランス語文法の「補語」概念を忍び込ませていたとなれば、ほとんど隠し球にも等しい卑怯な所業である。せいぜい英文法の「補語」しか知らない生徒・学生たちに対してあまりに不親切ではなからうか。小川環樹・西田太一郎『漢文入門』のようにフランス語文法の「補語」概念を広く用いるのももちろんのこと、多久弘一・瀬戸口武夫『漢文解釈辞典』のごとく「直接目的補語」だけを「目的語」と言い換えるのも、また天野成之『漢文基本語辞典』のように「状況補語」だけをフランス語文法から借用するのも、それぞれ真剣に漢文法を検討した揚げ句の措置とはいえず、結局は摘まみ取りなのである。前述のように、フランス語文法の「属詞」は採り入れず、そのまま英語流に「補語」と呼び、そのうえで、フランス語文法の「補語」概念があるいは広くあるいは狭く導入しているのであるから。

では、どうするか。結論として、漢文法からフランス語文法の概念を除去せねばならないのは明らかだろう。生徒・学生が戸惑い、教員とて満足に説明できないような概念を漢文法に紛れ込ませているのは、甚だ芳しからぬ事態である。全体としてフランス語文法の「補語」概念が薄

れてきた流れをさらに推し進め、天野成之『漢文基本語辞典』が一つだけ残した「状況補語」をも消去し、すべて取り敢えずは英文法の概念・用語で説明できるようにするのが得策だ。むろん、専門家用の文法分析は、別席での話である。とにかく生徒・学生に対しては、英文法の応用だけで事が済むようにしなければなるまい。すでに紹介したとおり、『漢文基本語辞典』がフランス語文法の「状況補語」を借用したのは、存在構文においてだけである。この「状況補語」さえ消して、何とか英文法のみで事足りるようにしてしまえばよいわけだ。

たしかに、存在構文について「状況補語」を持ち出すのは、それなりに便利である。けれども、前掲の「⑨状況補語」に関する説明を見て、ただちに危険を察知した向きも少なくあるまい。なぜなら、漢文では、存在構文において「有」や「無」に先立つ語句が「主語」なのか「状況補語」なのか、判断に迷う場面が容易に想像されるからである。事実、天野氏も、「有」の用例にこそ記していないものの、「無」を用いた例文では、「主語」と「状況補語」が区別しづらい場面をも想定しているのか、「主語または状況補語」という説明が目立ち、「莫」の解説において、どちらにも解せる例文として次の一句を挙げている。

群臣莫<sub>レ</sub>対<sub>レ</sub>。

訳Ⅱ 臣下のなかに誰一人お答えする者がいなかった。

この「群臣」は、一応「状況補語」と説明されているが、「主語とみなして、以下のように読んで訳すこともできる」とも言う。

群臣莫<sub>レ</sub>対<sub>レ</sub>。

訳Ⅱ臣下は誰一人としてお答えできなかつた。

右の例のみならず、「莫」の上方に位置する語句を「状況補語または主語」あるいは「主語または状況補語」と説明する字句は、「莫」に関する記述のなかに散見する。<sup>(10)</sup>存在構文で「有」「無」または「莫」に先行する語句が「主語」なのか「状況補語」なのかには、なかなか微妙な場面が少なくないわけだ。

フランス語文法の「状況補語」によって存在構文がすべてすっきり説明できるのであれば、堂々と「状況補語」を導入する意味があるだろう。しかし、「状況補語」を導入したとて、「主語」なのか「状況補語」なのか、今一つ明確でない場面に少なからず見舞われるのであれば、かえって混乱を深めるおそれすらあるのではないか。馴染みの薄いフランス語文法の「状況補語」概念を採り入れたうえで、なおかつ「主語」との判別が曖昧な場面が多いとなれば、いわば二重の意味での気苦労に悩まされるからである。例文ごとに「主語」か「状況補語」かを判別するのは甚だ煩わしく、しかも、どちらか判断しかねる場面が生じがちというのでは、何のために「状況補語」を導入したのか、よくわからなくなってしまうに違いない。

思うに、有効性に今一つ疑問が残る「状況補語」をことさらフランス語文法から採り入れる必要性は低いのではなからうか。いきなり結論を記してしまえば、存在構文については一律に「主語+有(無/莫)+目的語」と分析し、英語の第Ⅲ文型(SVO)に相当する文型と見なしておけば十分なのではないか。そのほうが漢文すなわち古典中国語の語感とも一致するのではないだろうか。

そもそも天野氏は、フランス語文法から「状況補語」を借用する理由

を説明しつつ、「漢文の〈有〉〈無〉の文型では、漢語の主語は訓読する」と、〈状況を示す文の副詞的要素〉と理解することも可能であり」と述べていた。「漢語の主語」すなわち漢文としては主語だと承知しつつ、「訓読する」うえで便宜から「状況補語」を導入した節が多分にうかがえる。しかし、文型は、あくまで漢文法それ自体の話だ。本来、訓読の便宜とは無関係のはずであり、また無関係でなければいけないだろう。漢文の助動詞「能」を、副詞として「能く」と訓読するからといって、漢文の文法分析にさいして「能」を副詞扱いするわけにはゆくまい。それと同じく、助詞「に」を付けて訓読するからといって、「有」「無」あるいは「莫」の上に位置する語句を「状況補語」とも呼ぼうとするのは、訓読という営為に義理立てしすぎた本末転倒なのではないか。「どのみち文型など便宜上の話だ。そこまで神経質になる必要はない」と言うかもしれない。しかし、いや、便宜上の話であればこそ、なるべく手間のかからない枠組みを用意しておくのが得策だと愚考する。存在構文は、おしなべて動詞「有」「無」「莫」などを用いた〈主語+動詞+目的語〉の構文、つまり英語の第Ⅲ文型(SVO)に相当するものと見なしてしまえば、何らの贅りもなく、すっきりするのではなからうか。

もちろん、文法上は第Ⅲ文型(SVO)で済ますとしても、解釈の段階となれば、話は別である。存在構文の「主語」が特に場所・位置・範囲を示す語句である場合は、「場所(位置・範囲)が」を持って「↓」場所(位置・範囲)に「がある」という解釈操作が必要となり、それに伴って訓読では一般に助詞「に」を付ける、と説明を付け加えねばなるまい。場合によっては、「主語の名詞が副詞(句)に転用されている」と説明することも可能だろう。いささか支え棒が必要といえども、そのような説明を付け加えるほうが、いきなりフランス語文法の「状況



「補語」を持ち出すよりも、はるかに生徒・学生たちにはわかりやすいのではないか。たとえ「状況補語」の概念を採り入れたとしても、右のごとき解説を加えたあとで、「主語が場所・位置・範囲を示している場合は、実質上、一種の状況を表す語句とも理解できる」くらいにとどめるのが穏当だろうと考える。教学の現場においては、英語の「補語」感覚では律しきれぬフランス語の「状況補語」概念は、取り敢えずお蔵入りとするのが賢明だろう。

以上、漢文法の「補語」について、差し当たりの私見を記した。厳密には、小川環樹・西田太一郎『漢文入門』（昭和三十二年）のころ、どのようにフランス語文法が講じられていたのかを調べる必要がある。基本文型を六種に分かつ方法が果たしてどれほどの普遍性を持っているのかも改めて検討する余地があるだろう。また、英語の「補語」概念として決して一枚岩との保証はなく、本稿は日本の英語教育で一般に用いられている「補語」をそのまま前提としているにすぎない。たとえば、A.D. Syrokonla-Stefanowska with the collaboration of Bi Xiyun, *A Classical Chinese Reader*, University of Hawaii Press, Honolulu; Wild Peony, 1996 の Grammatical Notes, p. 141 に載る「単文の一般文型」The common patterns of simple sentences を見ると、「伯牙游<sub>テ</sub>於<sub>レ</sub>泰山之陰<sub>ニ</sub>」の「於<sub>レ</sub>泰山之陰<sub>ニ</sub>」、「和氏得<sub>テ</sub>玉璞<sub>ヲ</sub>（於<sub>レ</sub>楚山中<sub>ニ</sub>）」の「（於<sub>レ</sub>楚山中<sub>ニ</sub>）」、「吾將<sub>レ</sub>曳<sub>ニ</sub>尾於<sub>レ</sub>塗中<sub>ニ</sub>」の「於<sub>レ</sub>塗中<sub>ニ</sub>」が、すべて〈Completion〉（補語）とされており、本稿で観察したフランス語文法における「補語」概念との近接性を示している。英語の「補語」そのものが実は不安定である可能性も低くないわけだ。

いずれにせよ、フランス語文法の「補語」概念を引き入れた現行の漢文法の文型表示に何らかの改善および統一方針が必要なことはたしかだ

ろう。何しろ、最近では、現代中国語を履修した漢文の教員が次第に増えているためか、ただでさえ英文法とフランス語文法が混入している漢文法に、現代中国語の文法用語まで組み入れようとする動きすら見受けられる。信じがたいと思う向きは、たとえば中野清『中野式漢文なるほど上達法』（ライオン社、平成十九年）をのぞいてみればよい。これは大学を受験する高校生向けの漢文参考書だが、「走<sub>ル</sub>三十里<sub>ニ</sub>」や「行<sub>ク</sub>七日<sub>ニ</sub>」のごとき「三十里」「七日」について、誰が見ても現代中国語の文法用語としか思えない「程度補語」（これまた「補語」だ！）という説明がほどこされ（四七頁）、さらには「以<sub>テ</sub>」が形成する「以<sub>テ</sub>錢<sub>ヲ</sub>与<sub>レ</sub>之<sub>ニ</sub>」のような構文を、または現代中国語の文法用語を使って「処置式」と解説している（七七頁）。某予備校の講師たる中野氏でさえ、現代中国語の文法用語を動員して憚らないわけだ。野放図な現状のまま事態が進めば、「現代中国語を学ばなくとも、訓読という方法で漢文すなわち古典中国語は十分に解釈できる」などと言いながら、実は漢文の文法説明に思わす知らず現代中国語の文法用語を忍ばせていたという滑稽な事態が起らないとも限るまい。

専門家向けの解説はいざ知らず、生徒・学生たちがすんなり理解できる文法用語、すなわち差し当たりは英文法の用語だけで漢文の文型を説明できる教学態勢を早急に整えたいものである。

注

- (1) 以下、多久弘一・瀬戸口武夫『漢文解釈辞典』（角川書店、昭和五十四年）（復刊）国書刊行会、平成十年）三～五頁。簡略を旨として、体裁・表記に変更を加え、四C
- 2の例文は中途で切断した。また、「目的語（客語）」のごとく、「目的語」に添えられた別称「客語」も省略に従った。ただし、太字・ルビは、原則として原書ママ。
- (2) 小川環樹・西田太一郎『漢文入門』（岩波全書、昭和三十二年）八頁。便宜上、漢

字の字体は、常用字体に改めた。

- (3) 以下、天野成之『漢文基本語辞典』（大修館書店、平成十一年）巻頭「本辞典の構成」vii頁下、viii頁下／「4 文型」。
- (4) 以下、倉方秀憲・東郷雄二ほか〔編〕『プチ・ロワイヤル仏和辞典』（旺文社、一九八六年）〔改訂新版〕一九九六年）一五七六～一五七七頁。内藤陽哉ほか〔共編〕『バスポート初級仏和辞典』（白水社、一九九一年）二二〇頁。\*phrase\* 項にも同様の「6 基本文型」が記されている。
- (5) \*complément\* : mot ou groupe de mots qui s'ajoute à un autre pour en compléter le sens: *Dictionnaire du français contemporain*, Librairie Larousse, 1971, Paris, p. 288.
- (6) 注(3) 所掲『漢文基本語辞典』三三九～三四〇頁。
- (7) 同右書三三二頁。
- (8) 同右書三二五～三二七頁。
- (9) 同右書二七八頁。
- (10) 同右書二七九～二八〇頁。

